

斯波照雄・玉木俊明編著

## 『北海・バルト海の商業世界』

元根 範子

貨幣経済の普及、都市の勃興、遠隔地商業の活発化によって発展したヨーロッパでの商業活動は、大きく言えば古代ローマ時代からルネサンスにかけて形成された二大商業圏を軸として展開された。従来のステレオタイプなイメージでは、これらはそれぞれ、日常生活の必需品から香辛料などの奢侈品までを扱う華やかな「地中海商業圏」と、北の海で生活必需品を扱う地味な「北ヨーロッパ商業圏」となっている。しかし、「北ヨーロッパ商業圏」ではハンザ商人のネットワーク、広範な地域における商品の移動、主権国家の発展と相まって、後の資本主義へと通じる活発な経済活動が展開されていた。中世における商業の復興から資本主義へとダイナミックに変化していく北の海の実態はどのようなものであったのだろうか。本書はそういった疑問に対して日本語で答えを導き出すものであり、「北ヨーロッパ商業圏」の発展を中世から近世に至るタイムスパンにおいて、陸上・海洋の二側面から多角的に論じた著作である。また、「専門の論文集ではなく、それぞれの専門分野の内容を、歴史に興味を持っている人たちに広く

読んでもらおう」（四頁）ことを趣旨とし、各分野の専門家を著者に迎え、全一三章で構成されている。

以下では本書の構成を紹介すると共に各章の内容を概略する。

序文「発展する北海・バルト海の商業空間」（玉木俊明）では、まず地中海と北海・バルト海が、自然環境／経済制度という点で比較される。それによると、海洋・海深では共に地中海が勝っている一方で、消費地でもある後背地の規模では北海・バルト海に軍配が上がる。また、北方ヨーロッパでは運河・鉄道・主権国家の発展から経済活動の保護・促進の風潮が生じ、交易の主要な舞台である北海・バルト海から資本主義が起こったとされ、この地域において商業史を研究する重要性が説かれる。

さて、本書の内容は次の三つに大別できる。すなわち、中世から近世にかけてのハンザ世界、中世と近世の北欧世界、そして中世末から近世にかけての主権国家の商業参入である。以下ではこの視点から各章を纏めつつ、紹介したい。まずは中世から近世にかけてのハンザ世界から見ていく。

第一章「中世のバルト海・ロシア交易——ハンザとノヴゴロドの商館交易」（小野寺利行）では、中世のバルト海を舞台としたロシア交易の変遷について論じられる。中世ロシアの交易はゴトランド商人との相互主義的なものから、一三世紀にはノヴゴロドのハンザ商館においてハンザ商人と独占的に取引を行う商館交易へと変化した。異文化間での交易は商館に滞在する商人たちの生活も含め、「スクラ」と呼ばれる商館規約や各種の条約に縛られていたとされる。しかし一五世紀以降、商館交易は次第に衰退し、

より自由で対等な交易がおこなわれるリーフランド地方のハンザ都市の台頭がもたらされた。

第二章「中世後期・近世のドイツの商業と北海・バルト海」(谷澤毅)は、北海・バルト海の沿岸地域を「海のドイツ」、内陸地域を「陸のドイツ」と分け、ドイツ商業世界について考察する。北海・バルト海交易は、リューベックとハンブルク二都市間の内陸路を両海域の中継地点としてドイツ・ハンザの下で発展したが、次第に荷物の積み替えを要しないエーアソン海峡が重要視されるようになった。そして一六世紀ごろに「海のドイツ」は世界経済の影響下にある北海側へと完全に舞台を移したとされている。一方、「陸のドイツ」は商業都市ケルンを中心とし、イングランドや低地地方の商業との関係性を基に、国際商業網の通商動脈を構築した。また、東欧からの輸送路の開拓のために商人たちがバルト海へと進出したことで、ケルンは海上交易路を通じても経済的な心臓部となった。

第三章「ハンザ都市の商業構造——北海・バルト海における塩とビール」(斯波照雄)は、ハンザ都市の商業構造の変容を生活必需品であった塩とビールから分析する。ドイツのハンザ諸都市は遠隔地間の中継貿易に経済基盤を置き、その一方で生活必需品・輸出品のビール醸造や製塩に携わっていた。一四世紀のハンザ都市の主要取引品は良質のリューネブルク塩であり、リューベックが独占的に輸出に携わっていた。しかし次第にリューベックを経由しないフランス西部産のベイ塩が市場を占め、ハンザの独占的商業は打破された。一方、自家醸造品であったビールは次第に近隣地域への輸出品に変化し、都市の独占産業となった。ビー

ルの生産・輸出に関連する税収入は都市の重要な財源となり、生産流通網は一八世紀以降、植民地産嗜好品の流通に転用され、ハンザ都市は植民地を含めた世界貿易に組み込まれていった。

第七章「フランドルとハンザ、そしてフランスとハンザ——ブルツへの浮沈をめぐる一つの物語」(山田雅彦)は、ハンザやフランスとの商業関係から中世の国際商業都市ブルツへの漸次的衰微について検討する。ブルツへはハンザ商館こそ置かれなかったが、フランスとの交易上でのハンザ商人の拠点であった。フランス交易での主要な買付け品はワインであり、その流通はしばしばイングランド商人との係争を引き起こしたとされる。国際商業都市ブルツへを支えたのはブルツへ・ステープル(指定市場制度)であったが、ハンザ商人はフランス王から得た特権を基に、次第にブルツへを経由しない流通網を構築していった。更に低地地方の領有をめぐるハプスブルク家とフランス王家の争いを発端として、一五世紀には年市の開催地であったアントワープに国際商業の中心地は移行していった。ハンザ商人も拠点を移し、ブルツへは衰退していくこととなった。

交易の主体であるハンザ商人について言及した第八章「中世ハンザ商人の世界——リューベックを中心に」(柏倉知秀)では、ハンザの中心都市リューベックの市長であり商人でもあったヨハネス・ヴァイツェンボルクの生涯から、ハンザ商人のキャリア形成や中世のハンザ商人が生きた世界が描かれる。近年の研究において、「ハンザの支配者たち」と呼ばれる都市エリートハンザ商人は各都市の政治指導者、軍事指導者であったと考えられている。ハンザ商人は幼いころから徹底的な教育を受けたが、その背景に

は一三世紀以降の市民主導の学校の創設や文書主義の普及、商業の形式の変化があつたとされる。成長したハンザ商人は自身の出身都市を核としてネットワークを各都市に形成し、指導者としてのキャリアに至つた。

第一章「中世後期から近世における陸上交易の発展と北海・バルト海の世界」（菊池雄大）では敢えて陸上交易に目を向け、北海・バルト海商業との不可分の関係性について議論される。気候条件や戦争など、しばしば海上輸送には制限がつきものであることから、陸上交易が重視される場合も存在した。北海・バルト海からもたらされた商品は、内陸における唯一の大量輸送手段である河川輸送によつて、ドイツの内陸諸都市だけではなく、遠く離れた中欧諸国にまで及んだ。

次に、中世と近世の北欧世界に関する章を見てみよう。

第四章「交渉するヴァイキング商人——一〇世紀におけるビザンツ帝国とルーシの交易協定の検討から」（小澤実）では、ビザンツ帝国とルーシの交易協定を検討し、北ヨーロッパ一帯で政治的・経済的に共有されてきたであろう「ヴァイキングの秩序」の形成について述べられる。「ヴァイキングの秩序」とは、スカンディナヴィア三国の形成と並行し、カロリング帝国解体から中世国家の形成に至るまでの二五〇年間（九一一世紀前半）にかけて、北ヨーロッパ世界に特有の在り方で政治・経済構造に秩序を与えたのがヴァイキングである、とする見方である。近年、商人としての側面が強調されるようになったヴァイキングだが、彼らによつて形成された秩序は各地への植民活動を通じて広まり、現地のそれと融合することで「拡大スカンディナヴィア空間」を創

出した。その一つである（キエフ・）ルーシは様々な国家と交易を行い、その主要な相手はビザンツ帝国であつた。彼らはビザンツ帝国との交易の際、文書を取り交わしており、略奪者ではなく「知性ある集団」として振る舞っていた。

第五章「中世アイスランドの商業——羊毛布と女性」（松本涼）は、主要輸出品「ヴァズマール」（羊毛布）から商業への女性の関与と一〇〜一三世紀のアイスランドの商業活動について分析する。中世アイスランドでは、外国商人から乗船権を購入し、島外での商業活動に従事するという手段が一般的であつた。このような「海外の旅」は男性の領域とみなされていたが、海外交易によつてもたらされた品々は男女を通じて大きな価値を持っていた。

また、主要輸出品であつたヴァズマールは女性の手によつて産出され、特にノルウェーで高い需要があつた。中世アイスランドの商業には間接的に女性の力が働いていたのである。しかし一四世紀以降、主要輸出品が魚へと変わっていくと同時に、生産の担い手も女性から男性へと変化し、商業における女性の関わりは希薄化したとされる。

第六章「中世ノルウェーの商業と経済——北方のタラ、ハンザ商館、そして黒死病」（成川岳大）は、中世半ばから後半期にかけてのノルウェー社会の変容を論じる。広域ネットワークの結節点として発展した都市ベルゲンは西部ノルウェーの北海沿岸に位置し、干しタラを主要輸出品として、リユーベックやイングランド等との取引に従事していた。ベルゲンの財務官は次第に大きな権力を握るようになった。外国との取引は港の背後地の社会経済を変化させるほど大きな影響を及ぼし、ノルウェーの繁栄を支え

一つの要素でもあったとされる。しかし、異常気象や黒死病が引き金となり、一四世紀後半からはノルウェーの社会・経済が大きく変化した。ベルゲンではハンザ商館が設立され、ドイツ商人の政治的影響力が強まり、ハンザのネットワークにノルウェーは組み込まれていった。

最後に、中世末から近世にかけて一つの主体として主権国家が商業へ参入する過程を追った各章を見ていく。皮切りとなる第九章「近世スウェーデンの都市計画と商業政策——グスタヴ・アドルフとストックホルムの首都化構想」（根本聡）では、近世スウェーデンの都市改造・計画を考察する。近世スウェーデンにおいて都市改造は大国を管理運営するために行政・経済・国防の点で重要課題であった。特に国王グスタヴ二世アドルフと宰相オクセンシェーナは中世以降継続され移動・巡回の体裁をとっていた宮廷を都市ストックホルムに在留させ、国家行政機構を集中させた。また、三度に渡る「商業令」の発布と関税制度の導入により内国・外国貿易の峻別が徹底され、ストックホルムは国際競争力を持つステープル都市としても機能した。更に、都市の建設・改造・整備は都市と農村の分業を促し、近世スウェーデン経済の秩序ある発展を支えた。

第一〇章「知られざる海洋帝国の姿——近世デンマークの海峡支配と国際商業」（井上光子）は、近世デンマークの国際商業とエーアソン海峡支配について分析する。多くの島嶼を領土に持つデンマークはハンザ勢力を牽制する立場を貫き、北海とバルト海を繋ぐ主要海上路であるエーアソン海峡を支配し、通行税を課したとされる。通行税はデンマーク王室の財政を支え、王国の発展

に寄与した。また、多くの特権貿易会社が世界中の海で交易を行い、連合下にあつたノルウェーや公領の商人の活躍を外交上の中立政策で保護し、一八世紀の平和の下で国際商業を発展させた。

第二章「近世のイギリスと北海・バルト海・大西洋の商業関係」（玉木俊明）は、近世イギリス帝国と三つの海の関係性、ヘゲモニーの確立を描く。一六世紀、未完成の毛織物を輸出品とした近世のロンドンには、アントウェルペンの「衛星都市」としてヨーロッパ経済と結びついていた。しかし次第にアントウェルペンの影響下から脱し、一七世紀にはバルト海・北海地域を取引相手として完成品の毛織物を輸出していたとされる。後にバルト海地域はイギリスの帝国化・工業化の重要な原材料供給地となるが、一八世紀後半には砂糖貿易によって大西洋の重要性が高まり、経済比重は北海・バルト海から大西洋へと傾いていった。

第三章「近世オランダのバルト海貿易——母なる貿易」（玉木俊明）では、近世オランダ貿易の根幹であつたバルト海交易について議論される。人口増と商業発展に起因する西ヨーロッパでの食糧危機・森林資源枯渇を補うものとしてバルト海の資源が重要となった。一七世紀中頃まで続く「穀物の時代」にはポーランドからアムステルダムには主に穀物が輸出された。一七世紀後半から一八世紀にかけての「原材料の時代」には造船資材の需要が高まる一方でイングランドの台頭がみられるようになるが、依然として海運業や金融においてはオランダの優位は明白であり、一八世紀後半においてもバルト海交易はオランダを支え続けた。

冒頭でも述べたように、従来の北海・バルト海のイメージは暗

く、地味なものであった。しかし、北海・バルト海は、塩やビールなどの生活必需品、後には植民地産の嗜好品を取引商品として扱う、多様な人間が精力的に活動した場所であり、より人々の生活に密着した場所であったことが本書からは伺える。更に、中世から近世にかけての商人主体の交易に次第に主権国家が参入してくることで、当該地域の商業活動は人々の生活だけではなく、国家の発展と切り離せないものとなった。よって、ヨーロッパの歴史的な流れを理解するうえで、北海・バルト海は地中海商業圏にも劣らない重要性を持つと考えられる。そこに従来のようなイメージは見出せない。本書を通読することで、経済活動に限定されるものの、北海・バルト海に対して抱かれる従来のイメージを修正する始点を読者に供することができることに本書の意義がある。

以上、本書の内容を概観してきたが、それを踏まえて、評者が関心を持つ北欧を取り上げた章を中心に論評を行う。

北欧史は西洋史においてはマイナーな位置づけにある。しかし、北欧地域は北海・バルト海が包摂する地域の北辺を担う地理的狀況にあり、交易主体者としてのヴァイキングやハンザ商人の活動範囲に含まれること、そして近世のバルト海交易の要所であったことから、当海域と北欧地域を切り離して語ることはできない。この点から、本書全体の約二分の一にも達する分量が北欧に割かれているのもうなずける。ただし、個々の章においては取り上げられた事例に疑問を抱くものもある。

第六章は中世ノルウェーの社会経済の変容を見るものであるが、

黒死病の流行とその後のハンザの影響による社会・経済の変化の実情を提示することで、新たな知見を広めるものであると評価できる。しかし、その一方で事例の偏りは否めない。当時の首都であり、また本書における話題の中心でもあるハンザの商館が置かれ、北大西洋の諸地域から流れてくる人・モノのステールであった都市ベルゲンが本章の中心であり、他都市の事例は登場しない。しかし、他都市の経済活動も中世ノルウェーの経済には欠かれない。例えば、北ノルウェー沿岸社会と、主要な支配者であるトロンハイム大司教についても一節が割かれているとはいえ、説明が不十分であるように感じた。トロンハイム大司教は一一五二／五三年の大司教座成立以降、聖俗にわたって大きな影響を及ぼし、王国参事会においては筆頭の聖職者であった。また、本書でも述べられているようにトロンハイム大司教は北ノルウェーの大地所有者でもあり、ノルウェーの主要産品であった干しダラがその富の基盤であったことから、中世ノルウェーの商業活動にも影響を及ぼしていたと考えられ、ノルウェー社会の変遷を語る上でも、もう少し紙面が割かれるべきであろう。また、ハンザ商人はベルゲンだけで交易を行っていたわけではなく、ベルゲン以南の港湾都市で商業活動を展開していたことから、他都市の事例は積極的に提示すべきであったと考えられる。

更に中世ノルウェー史を語る上では、ノルウェー本土と海外属領との関係は切り離せない。中世ノルウェー王国はスカンディナヴィア本土だけでなく北大西洋の島々を属領としており、広大な海上王国を形成していた。属領は本土と文化的・宗教的な共通性を有し、租税を納め、ノルウェー王国の繁栄を支える存在



であった。属領産の品々はベルゲンを介して国外へ輸出されていた。属領の一つであるアイスランドの商業活動の変遷は第五章で詳細に語られている。また、商業によって国外（主にハンザ都市）と結びつき、ベルゲンを中心に経済活動が展開される過程で、消費の舞台である後背地、特にノルウェー本土については本章で検討がなされている。しかし、国外との取引商品を産出する属領と本土（ベルゲン）との関係性については触れられておらず、あくまでベルゲンの商業活動のみに終始している。本土で産出できない商品が如何にして属領からもたらされるのか、その過程で双方の「商人」はどのような動きをしていたのか。中世ノルウェー史における属領の重要性を加味するならば、ベルゲンと属領の商業上の関係性についても紙幅が割かれるべきであろう。

次に第四章において、小澤氏はカロリング帝国によって構築された秩序の崩壊後からハンザ商人が台頭するまでの北ヨーロッパの経済システムに秩序を与えた集団としてヴァイキングを重視している。その根底には小澤氏が「辺境のダイナミズム<sup>①</sup>」で提示した「ヴァイキングの秩序」（以下、「秩序」とする）という見方が想定されている。確かに、北海・バルト海の各地域を商業的に結び、後のハンザの大規模な商業ネットワークの基盤を形成した点でヴァイキングに注目し、その行動基盤に「秩序」があったと想定することは理解できる。しかし、「秩序」が北海・バルト海の経済活動に及ぼした影響については本章では明らかにされていない。むしろ、本章の主眼はヴァイキングの後裔国家である（キエフ・ルーシとビザンツ帝国の交渉、そして古代地中海世界の伝統である文書システムのヴァイキング世界への流入に置かれてい

る。「秩序」の全容を解明するための一端として、ヴァイキングの活動範囲の一つであるルーシ地域の商業を事例とすることは納得できる。しかし、ルーシ地域での商業上の文書契約が「秩序」の下での行為であるならば、北海・バルト海の経済活動においても同様の行為が行われていたことを言及する必要がある。しかし、「秩序」を共有する北海・バルト海地域の文書契約事例については、政治的なものしか挙げられておらず、やはり経済面での「秩序」の影響については曖昧なままである。ヴァイキングの後裔国家の一つであり、北海の商業ネットワークの一大拠点であったノルマンディー公国のルーアンは商業上の「秩序」の影響を明らかにする好例となりうる都市であるが、本章末では紹介のみに留まる。北海・バルト海商業における「秩序」の影響については、これからの研究を待たなければならない。

最後に、全体の構成として、特徴の一つである「入門書」であり「論文集」でもあるという立場について触れておきたい。本書は北海・バルト海商業圏全体を見渡す書籍として、初学者にもわかりやすく、かつ内容の質を維持することを目指したものとなっている。しかし、各章は厳密に時代順に配置されてはいない。よって、中世から近世にかけての北海・バルト海地域に関わる商業の共時的な状況については把握できるものの、時代の流れに沿って北海・バルト海商業全体についての理解を促す配慮がなされているとは言い難い。また、「論文集」でありながら「入門書」としての体裁を取っていることから、註が付されていない。これにより、専門的な部分がわかりづらく、読者の理解は阻害されている。加えて、註がないことで、本書を基にして更に議論を深めて

いく作業が難しくなっていることは否めない。本書の言葉を借りるならば、「内容の質を維持しつつ気楽に読み進める」ためにも、専門知識の解説という意味で註は付すべきであったのではないだろうか。本書の様々な試みは広汎な層の読者を対象とするためのものとしては評価できる。しかし、主となる対象者が定められていないことから、本書の立場についてはどっちつかずな印象を受けた。

本書の執筆における原点は、個別地域の事情に主眼を置き、「特に興味のある時代・地域に限定して専門的な内容を容易に読めるような本も必要ではないか」(四五四頁)という編者たちの想いである。その意味では、初学者にとっては北海・バルト地域に関する大著である『ヨーロッパの北の海』<sup>②</sup>と併せて読むことで、本書では抜け落ちている内容もカバーできる。本書が日本語で書かれた、数少ない中世から近世、近代にかけての北海・バルト海世界を理解するための「入り口」として、幅広い読者の手に渡ることを切に願い、本書の出版を契機に歴史学の様々な分野で当該地域の研究が進展することを期待したい。

- ① 小澤実、薩摩秀登、林邦夫著『ヨーロッパの中世』<sup>③</sup> 辺境のダイナミズム、岩波書店、二〇〇九年。
- ② デイヴィッド・カービー、メルヤ・リーサ・ヒンカネン著、玉木俊明他訳『ヨーロッパの北の海：北海・バルト海の歴史』、刀水書房、二〇一一年(原著：二〇〇〇年)。